

# 村民目線の村政を求む！

## 建設に約40億円以上

長年の懸案である山中小学校と東小学校の統合問題で、山中地区にある旧レジャータウン跡地を統合校の候補地とし、その調査費1、600万円が計上されていました。樋口は、前のめりの統合騒動について地域住民とのコンセンサスを十分とるよう要請しました。他の議員も、統合は良いとしても、当該予定地は相応しくないとの意見が大勢で、当局は調査事業費を取り下げました。

# じっくり考えなくては！小学校統合問題

予算委員会で「統合総額はいくらか？」との質問に教育長は「約29億円です」と回答。休憩中に関係者から「実際は全部で約40億円だ」と聞き、教育長の説明や答弁は、簡単に信用できません。

村民には、予算を含む「統合事業計画の実態」を知ってほしいと思います。

## 東電跡地を提案

ローコストで災害の心配なし

樋口は、俄かに統合に賛成はしません。仮に村民が統合を「可」とした場合、統合校の建設候補地として交流プラザに隣接する「旧東電保養所跡地」を提案しました（一般質問）。

湖村を象徴する美しい景観地であること、億単位の土地代が掛かりません。運動施設もあり、教員住宅も近所の空家を借上げれば問題なく、最高の自然環境でローコストの教育施設が出来上がることを提示しました。勿論、この場所は、富士山噴火の溶岩流や豪雨による土石流の心配も全くありません。

## 目的は後回しで公有地取得？

小学校の統合用地として入手予定していた旧レジャータウン跡地は、議員全員の反対で白紙となりました。ところが、同じ土地に対し今度は「公有財産取得」のための土壌調査費として1、120万円を計上した修正案を提出。事業計画も購入目的の見解で二人が反対。だが賛成多数で可決。賛成の主な理由は、当該土地が売りに出ている、中国人に買われたくない、山中地区に村の土地が少ない等です。そもそも「売地」の地質等に疑念があれば、「売主」が調査して疑念を晴らすのが常識です。したがって、調査費1、120万円は、無駄と同時に不当な税金の使い方であり、全く村民不在の議論です。

## 一般質問

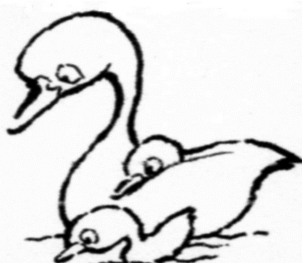
十二月定例議会では、森林整備による産業の創出と「里山庭園」構想、「畜犬・迷犬対策の展望」、「村民が安心できる医療行政の確立」を提案しましたが、三月定例議会では、次の3点について提案型一般質問を行いました。

### ○「健康立村」の大きな可能性

本村は標高1、000mの高原リゾート地で、世界の聖地といわれるエルサレム、カトマンズ、高野山なども、約800mから1、000m前後の地にあります。また、このほかに標高1、000mあたりの気圧は、胎児が胎内で感じる気圧とほぼ同じで、脳の活性においても好条件だといわれます。この意味でも本村は、人々に癒しと安らぎを与える、他に類をみない素晴らしい立地なのです。

### ○交通弱者へ救済策を

村の「交通弱者」に対する多様な支援体制を評価し、現場の労をねぎらいたいと思います。しかし、地域コミュニティに包括されていない高齢者は相当数おられます。互助の体制をより充実させるための公助の仕組みづくりとして、相乗りサービスの手法は、検討に値します。



国が進める相乗りサービス（ライドシェア）は、ビジネス的対価が伴い、互助や相互扶助の精神とは少し外れるため、次の提案はどつでしよう。

まず共通の通帳を用意し、買い物や通院等で相乗りサービスを利用した場合、互いに「お世話ポイント」を記入しあいます。お世話した方はプラス、ポイント、お世話を受けた方はマイナス回数ポイントを記入します。車はないが庭の草とりができます。車はないが庭の草とりができます。車はないが庭の草とりができます。

## 診療所費用が2倍に

診療日が、一月までは週2日で二月から週4日になった平野診療所が、四月から週5日となりました。しかし、昨年の六月まで長年担当していた医療法人と、やっと同じ週5日の診療体制になったが、支出する補助金は1、000万円増額の2、500万円に。また医療法

人が交代したことで新たに医療機器のリース料が438万円増え、総額は前医療法人は1、500万円だったのに2、938万円となり、約2倍の税金の支出となりました。さらに、山中診療所の開設については、初めから計画されていません。議会の指摘や村民の願いを無視した、村長の約束違反は明らかです。

互いにお世話役になるシステムです。これを円滑に運用するためには、行政の公的助けが必要だと思えます。

### ○英語教育と人づくりの課題

本年度から英語特区として、保育所から早期英語教育を行う予定です。かつて英語・スペイン語の同時通訳者として大活躍した鳥飼玖美子さんは、「危うし！小学校英語」という著書の中で、「幼い子が英語塾に通った遊びに夢中になったり、空や雲を見上げ、道端の草や花に見とれ、小さな虫を見つめ、犬と遊ぶ、そんな些細なしかもかけがえのないひと時が、どれだけ貴重なことかと思えます。」一人のまっとうな人間として生きていくためには、「惜しみない愛情」と「豊かな母語」が欠かせないでしょう。」と云って小学校の英語教育に厳しい問題提起をしています。

また1960年代に「沈黙の春」など環境問題を告発した生物学者、レイチェル・カーソンは、「センス・オブ・ワンダー」（神秘さや不思議さに目を見張る感性）の中で、「感じることは、知ることよりはるかに重要である」と述べています。この二人の女性の発言の中に、「人づくりの基本」があります。

そもそも英語は、人と人とのコミュニケーションの道具の一つです。その道具を使う本体である人間教育が何よりも基本であるはずですが、真の「国際人」を育てるには、早期英語教育を施すより、生まれ育った郷土や文化に誇りをもち、相手の文化を尊敬をもって理解し受け入れる豊かな感性を培うことです。語学は、中学校からでも十分に合つはずだと考えます。